

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2019年8月10日

文責：JUN

第21回授業づくり・学校づくりセミナーを終えて

台風が梅雨空を吹き飛ばした後一気に訪れた真夏の暑さの中、名古屋国際会議場において、今年もセミナーを開催した。昨年より多い570名を超える参加を得て、会議場は2日間とも、外の暑さに負けないほどの熱気に包まれた。

一日目は、英語教育と学び合う学級文化という喫緊の現代的課題についてとても大切な報告と講師の講演、及び、報告者との対談があった。英語教育については、本当に伝え合い聴き合える英語とはどういう言葉なのか、そのためどう学ぶ方をすればよいのか、これまで行われてきた英語の授業はどうなのか、など考えさせられることばかりだった。それは二日目の中学校分科会の報告ともつながり、大きな学びを得ることができた。学び合う教室文化については、「主体的・対話的で深い学び」への取り組みにおいて、報告された一つひとつが有意なことばかりであった。対話的で深い学びは、一つのやり方をすればできるということではなく、教室自体を学び合う行為と学び合う意識と学び合う喜びなどに満ち溢れた世界にする、つまり学び合いが文化として根付く空間になることなのだとしみじみと気づかされた。

二日目の午前は、小学校2つ、中学校1つの分科会だった。それぞれ2本ずつの報告があり、参加者とともに協議され、講師のコメントがなされた。この分科会が、参加者がもっとも具体的に授業のあり方に触れる時間である。報告された授業は、どれも真摯に取り組まれたものばかりで、報告はビデオ映像を活用し実際の様子が伝わるように実施された。授業の学習課題から学んだという人もいるし、学ぶ子どもの姿に羨望の眼差しを送った人もいるし、子どもの学びに対する教師の対応のあり方をじっくり考えたと言った人もいた。分科会の報告は、セミナーのメインである。講師の講演はもちろん参加する人たちにとって魅力的だろうけれど、21年間続けてきた私たちにとっては分科会の報告がセミナーの中心である。セミナーを、講演を聴くだけの会にしてはならないと思っているからである。分科会にどれだけ良質で意味ある報告（見栄えのよい巧みな授業ということではない）を用意できるか、それがセミナーの命なのだと知っている。

二日目の午後は、対談と講演だった。対談を行ったのは私なのだが、このことについては、この後の拙文を読んでもらいたい。講演は、「一人ひとりを学びの主権者に ～探究と協同の共同体」と題して行われた。それは、私たちが日々向かい合っている子どもたちに、どう学びを提供していくのか、それが子どもを学びの主権者にしていくということはどういうことなのか、それが、具体例をあげ、学ぶ子どもの写真を映し出し、外国の例も取り上げながら話されていった。毎年のことだが、セミナー最後の講演は、自分たちの足元を見つめ、これから先の世界をみつめる重要な時間で、この講演を聴いて明日への新たな意欲が高まる。

セミナーを終えて2週間、心は来年のセミナーに向かった歩みを始めている。来年は大阪開催である。それまで一年、それぞれが精一杯実践し再会したい。参加された皆さんに感謝である。

文学の味わいを求め続ける自分に

1 対談における私のミス

第21回授業づくり・学校づくりセミナーの二日目、私は「文学の授業で大切にしたいこと」と題した対談を行った。対談相手は30年以上の交流があるKさん。

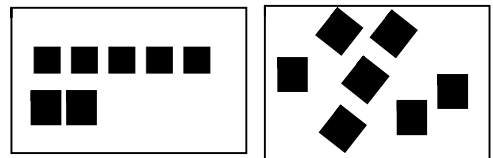
1時間15分の対談時間において、文学の授業で何を大切にしていけばよいのかという二人の考え方のおおよそは語り合えたかと思う。なかには、それは文学の授業だけのことではない、と思えることまで出し合うことができ、濃密な時間となった。しかし、私は、肝心かなめのところで、もっとも大切なことに迫り切れない痛恨のミスをしてしまった。そのとき私は得体のしれない動揺を感じた。だからその後、明らかに私の心理状態は変化した。どうにかKさんとの対話を続けながらも、頭の中はどうかしななければと思いを巡らせた。しかし、筋書きのない突発的なことだったこともあり、何をどうすればよいかの判断がつかず、対談の後半でそのミスを挽回する手を打つことはできなかった。

おそらく、対談を聴いてくださった皆さんには、そのミスとはどういうものか、そしてミスの後、私の心理状態が変化していることはわからなかったかもしれない。けれども、私は、このことをなかったこととしてそのままにしておくことはできないと思った。それでは、対談を聴いてくださった皆さんに、そして何よりもKさんに対して申し訳ないと思った。そこで、遅ればせながら、このたよりにその顛末を記すことにしたい。それで了解していただきたい。

2 文学の味わいはわかることなく、感じること

まず、その瞬間までに、Kさんが話されたこと、私が語ったこと、そして私が一つの詩を提示したことを知っていただく必要がある。

Kさんの話は、Kさんが参観された算数の授業での出来事から始まった。子どもたちが図のようにブロックを並べて学んでいたときのことだった。左のように並べると、「 $5+2$ 」



のたし算の学びになる。ところが、右のように、ブロックをバラバラに置いて「金魚さん」と呼んで、まるで金魚が泳いでいるようにながめた子どもがいたというのである。そしてKさんがおっしゃったのは「こういう見方ができないと文学は味わえない」ということだった。ただし、Kさんは、それはなぜなのかという説明はされなかった。私はそれを聴きながら、そのKさんの問題提起そのものが文学的だと感心したのだった。

一方、私は、「文学は『解釈』するというより味わうもの」なので、「わかろう」として読むものではないと話して、次ページに掲げる、八木重吉の「桃子」という詩を朗読したのだった。

私たち二人が話したことは一致していた。それは、文学は理詰めで理解するものではなく、感じるものだということであった。そのことは、対談において浮き彫りにすることはできた、言葉としては。

しかし、大切なのは、本当にそうなのだと腑に落ちることだ。それには、そこにいた参加者一人ひとりが、そういう味わい方を経験しなければならない。私が、詩を持ち出して朗読したのはそのためだった。その詩で「解釈ではなく味わいだ」と感じていただこうとしたのだから。

「桃子」の詩の朗読をした後、しばらく私たちは「味わい」ということについて語り合った。その話題が「桃子」の詩に及んだときだった。Kさんのその言葉はまさに唐突に発せられた。

「この詩には『死』が感じられる」

正確にこうおっしゃったかどうか、私の記憶は不確かだ。しかし、「死」ということを語られたことに間違いはない。私はどきんとした。たった今、「文学の読みに正解はない。読むのは一人ひとり」ということを話して、Kさんが出されたことは、大半の人は夢想だにしない感じ方であり、それこそKさんの文学の味わいだと思ったからである。

咄嗟に私は、「文学の読みの多様さ」ということを口にした。多くの方は、生き生きしたかわいい桃子の姿を読み描くだろうけれど、そこに何らかの「死」を感じるということも一つの読みであり、そこにこそ文学の味わいの醍醐味があるという持って行き方をしたのだった。

私は、Kさんの言葉をそれだけで済ませてしまった。私がミスをしたと思うのは、このとき私は単なる対談から抜け出せなかったからである。「金魚さん」という感じ方を受けとめられなければ文学は読めないとおっしゃったKさんが語られたのが「死」だったわけである。その瞬間、そのKさんの感じ方を受けとめ、すべての参加者の文学の味わいにつなげなければならなかった。そうしなければ、私が言っていることは説得力を持たない。それには、Kさんの考えが出た瞬間、私とKさんだけが語る対談から、参加者の皆さんとともに文学を味わう「学び合う学び」を実践する場に切り替えなければならなかったのだ。それができなかったのは、私にとって痛恨のミスだった。

3 あのときすればよかったこと

では、あの対談の場で、私にできることは何だったのだろうか。

そう考えたとき、なんとしても行う必要があったのは、「桃子」の詩の音読だった。Kさんが語った「死」は、桃子の死なのか重吉の死なのかはわからない。どちらにしても、それぞれの参加者がそう読むかどうか別にして、かわいい愛児が無邪気に父親のほうに向かって走ってくるその姿の奥に漂う「死」を感じながら読んでみるようにしなければならなかったのだ。そうすれば、Kさんに近い感じ方をする人も生まれるだろうし、そういう感じ方もあるのかと思う人もいるかもしれない、全くそういうことは感じられないという人もいるだろう。文学の読みに正解はないのだからそれでよいのだが、異質な読みに触れること、自らの読みと擦り合わせることを怠ってはならない。それこそが文学の授業における「学び合う学び」だからである。

とにかく、あのとき、参加者の皆さんに音読をしてもらうべきだった。最低限それは必須のことだった。そして、それで終わってもよいが、さらにもう一歩進めて、音読してみて、何を感じたか、それを近くの人と語り合い聴き合ってもらってもっとよかったのではないだろうか。

文学を味わうということは、文字にされているままのことが「わかる」ということではない。文字

桃子

つかれて帰ってきたらば
家のほうからひらひら桃子がとんできた
赤いきものを着て
両手をうんとひろげながらそっくりかえって
ぷつぷつぷつ独りっことをいいながらやってきた
わたしのむねへ
もも子がかうころ赤くうつるようなきがした

八木重吉

にされていることの向こう側にある得体のしれないものを感じるということなのだ。ブロックを金魚さんと言った子どものような感じ方がなければ文学は味わえないとKさんがおっしゃったのは、そういうことなのではないだろうか。だとすれば、あの場で、ここに記したようなことをしなければ、Kさんの考えを皆さんに伝えることにはならなかったのだ。Kさんにとっての金魚さんは、「桃子」という詩の中に存在する「死」という感じ方だったのだから。

私は、対談の場で、そういう対処をすることができなかった。それは私にとって痛恨のミスではない。それができれば、Kさんの考えを伝えられたばかりか、参加者の皆さんが今後行うことになる授業において登場するかもしれない思いもかけない子どもの気づきに対応するとはどういうことか、そのあり方を実感していただけることになったかもしれないのだ。

ところで、Kさんが感じた「死」を私はどう感じていたかについて述べておこうと思う。

この詩は表面上、幸せオーラに満ちているように見える。愛らしい我が子の姿によって、疲れを癒された父親像が浮かんでくる。しかし、それではあまりにも当たり前すぎる、一読してわかってしまうようなものなら文学性が薄い。文学や詩は、読めば読むほど、何かがある、もっと違うもの、もっと深いものがあると感じられるものほど文学らしい。だから、詩人、八木重吉が、こんな当たり前すぎる当たり前の娘に対する思いを、ただ当たり前に映し出したとは思えない。

私は、人の心はいつも真逆ともいえる二つの面を有していると思っている。幸せな状態のときにはしんどさ厳しさが裏に貼り着いていることが多いし、つらい状態のときにはどこかに幸せへの通路が開かれている、そう思っている。だから、重吉にこれほどまでの喜びを感じさせるその奥に、重吉にとってどんなに辛いものが存在しているのか、と感じてしまうのだ。いえ、その辛さがあるからこそ、桃子の存在が、桃子のかわいさがたまらなくいとしいのだ。それをKさんは「死」だと感じたということなのだろう。

詩人・八木重吉も、その子ども桃子も実在の人物である。詩集を紐解けば、二人がこの後どうなったかということはわかるにちがいない。しかし、そういう事実を知って、だからこうなのだと結論づけるのは文学・詩の読み方ではない。文学・詩の読みは、どこまでもそこに表現された言葉に触れて、自らの想像の翼を広げることだ。それが事実と異なってもよいのだと私は思っている。自らが想像したこと、自らが感じ取ったことは、自らにとって真実なのだと思う。もちろん、それは勝手な読みではなく、そこに表現された言葉に深く触れてのことでなければいけないが。

ただ、誤解していただいては困るので、あえて最後に申し添えておくが、子どもたちと「桃子」を読む授業を行ったとして、そこで「死」という感じ方を出さなければいけないということでは決してないし、それが出てこない授業はよくないということでもない。そうではなく、私が述べているのは、あの対談における文学の味わい方として不十分だったということなのだ。対談で私が述べたかったこと、そして、おそらくKさんが述べたかったことはここに私が記したことだったと思うだけに、それを単なる考え方として提示するのではなく、具体的に、この詩の鑑賞を通して実感的に皆さんに届けるべきだったということなのだ。それなのに、私は一瞬のチャンスを逃してしまった。それは、私のミスである。Kさんはもとより、セミナーに参加して下さったすべての皆さんがこの文章を読んでくださるとは限らないのだけれど、この文章をお届けすることでご容赦いただきたい。

文学の味わいを求め続ける、どんな場においてもそれを実践する自分でありたいものだ。